

〔共同研究：インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究(Ⅱ)〕

バリプロテスタント教会と 本学ワークキャンプの交わりから

深 見 純 生

目 次

はじめに

1. 本学のワークキャンプの歴史をたどるには
 2. 林陸雄のバリ研究
 3. 『GKPB の歴史と活力』
 4. ウィドヤ・アシ財団
 5. ソカ村のセンゴン（ファルカタ）植林プロジェクト
- おわりに

は じ め に

本共同研究（インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究Ⅱ）の成果報告としてすでに林陸雄の「バリ・プロテスタント・キリスト教会の社会事業と学生による支援活動」と題する論考が発表されている〔林 2011〕。林のこの論考は本学の国際ワークキャンプといういわば身内の活動とその受け入れ先を主な研究対象とするものであるが、本学のワークキャンプは日本の大学における同種の活動としては比較的早期に始まったものであり、またすでに四半世紀を経て継続しているので、日本とインドネシアの交流について考える本共同研究における検討材料としてこれを取り上げるのは十分意味のあることである。なお、本学のこのワークキャンプは2000年までインドネシア・ワークキャンプ、2001年から国際ワークキャンプ（インドネシア）と称している。

本学のワークキャンプの受け入れ先はバリ・プロテスタント・キリスト教会（GKPB: Gereja Kristen Protestan Bali）であり、本稿ではバリプロテスタント教会またはGKPBと記すことにする。具体的な受け入れ先はその下部組織のひとつウィドヤ・アシ財団（YWA: Yayasan Widhya Asih）であり、この財団が運営する児童養護施設が活動の場である。なお、ウィドヤ・アシはウィディア・アシと表記されることも多い。

本稿では林の上掲の論考の続編として、最初に本学のワークキャンプの全体像を捉えるための文献を取り上げたうえで、林のバリ研究が相互に関連しつつも3つの分野に分けられる

キーワード：バリプロテスタント教会，桃山学院大学，国際ワークキャンプ，ウィドヤ・アシ，
林陸雄

ことを示す。つづいて、最近（2012年）バリプロテスタント教会が自らの歴史を編纂刊行した『GKPBの歴史と活力』と題する書物の概略およびその中のウイドヤ・アシ財団に関する部分を紹介し、最後に同財団の最近の事業であるソカ村の植林について林とは異なる側面から若干の補足をしておきたい。

1. 本学のワークキャンプの歴史をたどるには

本学の国際ワークキャンプ（インドネシア）について、その具体的な全体像を手に入れようとすると意外に難しい。『アジアの人びとの協働から学ぶ』と題する報告書が毎回作成されているので、これをたどっていけば具体的な姿がわかりそうなものである。しかしながら、具体的な日程がわかり参加学生たちの思いは十分に伝わるのであるが、このワークキャンプの意義や価値、成果の総括とそれをふまえた今後の展望などといった枠組みに関わることは毎回の報告書ではわかりにくいのである。

幸いなことに10周年記念出版『アジアの人びとの協働から学ぶ——桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプの歩み』〔桃山学院大学 1997〕があり、関係者が様々な意見を寄せている。中でもワークキャンプの生みの親にして育ての親ともいうべき藤間繁義の「国際協力の架け橋となることを願って——学生たちとのワークキャンプ四十五年を省みて」〔藤間 1997〕は、本学のワークキャンプ10年間を記録し評価するだけでなく、自身の45年にわたる経験を踏まえて国際ワークキャンプの意義と本質を論じている。大きな認識の枠組みを提示しているといつてよいが、当然ながら本学のワークキャンプについては最初の10年に限られる。

つぎに本学のワークキャンプの20周年に際して『桃山学院大学キリスト教論集』第43号が20周年記念号として特集を組んでいる。その中で坪山孝「国際ワークキャンプ・インドネシア20年の歩み」（117-131頁）が全20回の日程、参加者数、ワーク内容や各回の特徴などを簡潔に紹介している。各回の報告書を通読して全体像を把握しようとする場合の鳥瞰図としてたいへん有用である。

この20年間に全20回行われたことには少し説明が必要である。最初の4回（1987～1990年）は春休みに行われた。年度でいえば1986～1989年度である。5回目（1990年度）から夏休みに行われるようになったので、1990年は春休みと夏休みの2回行われた。他方、2003年は前年のテロ事件などの影響により中止となり、「幻の18回」と通称されている。第18回は2004年度になって、2005年春休みに行われた。第19回（2005年度）から再び夏休みに行われるようになった。そのため2005年は春休みと夏休みに2回行われた。こうして1987年春から2006年夏までの20年間に20回行われたのであるが、年度でいえば1986年度から2006年度までの21年度にわたったことになる。バリ以外にスンバ島で1992～1995年度に4回行われているが、その第1、3、4回は1992、1994、1995年の夏休みにバリと同時に行われ、第2回（1993年度）は1994年の春休みにバリとは別個に行われている。したがって1994年は春休みにスンバ

島で、夏休みにバリとスンバ島で行われた。

林陸雄はこの20周年特集号で本ワークキャンプの教育プログラムとしての位置づけ、国際支援プログラムとしての位置づけ、実施上の問題点と改善案、そして今後の展望を具体的に論じている〔林 2007〕。林は各回の報告書でも折に触れて本ワークキャンプの由来・背景と現状そして今後の方向性を語っている。こうした林の一連のワークキャンプに関連する現状の問題点と展望に関する論考の最後のものとなったのが、本研究プロジェクトの報告「バリ・プロテスタント・キリスト教会の社会事業と学生による支援活動」〔林 2011〕である。

この2011年の論考のなかで林はワークキャンプをワークの内容に基づいて3期に分けて概観している。第1期、1987～1999年（第1～14回）、ムラヤの第5ウイドヤ・アシの建設。第2期、2000～2005年（第15～19回）、プリンビンサリの第2ウイドヤ・アシの改築。第3期、2006～2010年（第20～24回）、同じく第2ウイドヤ・アシにおける増築と整備など。その後の2011・2012年（第25・26回）は第3期の延長上にあるといえよう。また、スンバ島におけるワークの主な内容は植林であった。

林の2011年の論考は本研究プロジェクトの研究成果として書かれたものである〔林 2011：142〕と同時に、その末尾によれば、また病床で筆者らに語ったところによれば、本学のワークキャンプに関する単行本のための準備作業であった。

2. 林陸雄のバリ研究

林陸雄（1940-2012）は、退任記念号となった『桃山学院大学キリスト教論集』第45号の「林陸雄教授略歴」（241-242頁）によれば、桃山学院短期大学の廃校にともなって桃山学院教育研究所（1989年）を経て桃山学院大学文学部に移った（1990年）。林はその1990年夏（第5回）から毎回ワークキャンプを引率している。前節で述べたように1992～1995年の4年間ワークキャンプはバリとスンバの2カ所で行われ、このうち3回は夏休みに同時に行われたが、この3回では林がバリ隊の引率責任者を務めた。

林は2度の教員の特別研修（1996年度1年間および2005年度後期から2006年度前期までの1年間）の機会に恵まれたが、これをはさんで引率者としてあるいは側面からバリプロテスタント教会側との調整役としてワークキャンプに関わり続けた。のみならず、特別研修においても2度ともその期間の大部分を第4ウイドヤ・アシ（所在地名によりウンタル・ウンタルと通称される）を中心に、現場で社会福祉に関する調査研究を行った。その研修の成果は1997年から一連の論文や翻訳となって現れている。

林にはワークキャンプに関連のある多数の論文や研究ノートまた翻訳がある。筆者には林の調査研究活動を正しく分析し紹介する能力はないので、ここでは単に大きく3グループに分けられるであろうことを述べて今後の参考に供したい。第一に本学のワークキャンプ自体のあり方とこれに関連する事柄を取り上げるものである。第二はインドネシアにおける教育の問題あるいは教育を梃子に貧困の連鎖を断ち切ることに關するものである。第三にプリン

ビンサリにある第2 ウィドヤ・アシの児童，およびこれら児童が通うバリプロテスタント教会立第2小学校の児童を対象とする，栄養状態と発育問題に関する一連の調査とその分析である。次に林の著作を3つのグループに分けた上で，刊行年順にあげておく。林の著作目録としては先にあげた『桃山学院大学キリスト教論集』第45号「林陸雄教授退任記念号」の中に「林陸雄教授主要著作目録」がある（244-247頁）。しかし，ここには当然ながらワークキャンプ関係以外のものが含まれ，またここに示されるタイトルだけではワークキャンプとの関連が不明なものがあり，かつまた一部書誌の事項が不十分であり，また当然ながら退任後の論考は含まれていないので，ここに再掲することにする。

第1 ワークキャンプの課題と展望

1993「バリ・スカラシップの意義と今後の展望」『桃山学院大学キリスト教論集』29：55-69.

1997「世界市民としての意識形成——ワークキャンプの教育的意義」桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会編『アジアの人々の協働から学ぶ——桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプの歩み』聖公会出版

1997「インドネシアにおける貧困問題と養護施設の現状——バリ・プロテスタント・キリスト教会の活動」『桃山学院大学キリスト教論集』33：223-244.

2007「桃山学院大学における国際ワークキャンプの課題と展望」『桃山学院大学キリスト教論集』43（国際ワークキャンプ20周年記念号）：43-69.

2007“The Meaning of the International Interchange, International Understanding and that Subject”『桃山学院大学キリスト教論集』43（国際ワークキャンプ20周年記念号）：197-203.

2010「バリ子ども舞踊団招聘プログラムについての報告」『桃山学院大学人間科学』38：217-262.

2011「バリ・プロテスタント・キリスト教会の社会事業と学生による支援活動」『桃山学院大学キリスト教論集』46：121-158.

1993年のものは，毎回のワークキャンプの報告書を別にして，おそらく林がワークキャンプ関連で書いた最初の論考である。表題のバリ・スカラシップの会（BSA: Bali Scholarship Association）は第1回のキャンパー達が設立した，児童擁護施設出身者に大学4年間の奨学金を給付するための組織であり，本稿はその意義と課題を論じるものではあるが，じつはそれ以上にワークキャンプの課題と展望を論じている。1997年の2つの論文ではワークキャンプ10年の節目における林の認識が示されている。10周年記念出版の中の論文では，ワークキャンプの教育的意義の大きさとその有効活用を論じている。改めていうまでもないことだが，本学のワークキャンプには教育的側面と同時に国際協力の側面がある。1997年の雑誌論文の方では後者の側面に重点を置いた議論がなされている。すなわちワークキャンプを受け入れているバリプロテスタント教会と児童養護施設事業の課題と展望というべき内容になってい

る。この2つの側面が必ずしも矛盾なく調和しているわけでないことが林が認識していることは、彼の議論のなかにしばしば示されるとおりである。2007年の論文は20年の節目における課題と展望を示しており、2011年の最新の論考はそれをさらに展開したものであり、その後の活動の報告である。なお、ワークキャンプの課題と展望について林は毎年の報告書の中や下記の第2、第3グループのなかでもしばしば触れているので、林がこの20年あまりの間にどのような課題を認識し、また展望を描こうとしたかを知るにはこれらをあわせて参照する必要がある。

第2 教育

- 1995「職業選択とその社会経済的背景——バリ・プロテスタント・キリスト教会立学校中・高生の場合」『桃山学院大学キリスト教論集』31：31-51.
- 1997「中学校教育の義務化と未就学問題（インドネシアの教育事情1）」『桃山学院大学人間科学』12：161-181.
- 1997「インドネシアの教育あれこれ」（阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会課題研究会報告）（筆者未見）
- 1998「インドネシアにおける義務教育完全実施の経緯」『阪神教協リポート』（阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会）21。（筆者未見）
- 1999「〔翻訳〕1991年12月31日付 学校外教育についてのインドネシア共和国政府規定1991年第73号」『桃山学院大学総合研究所紀要』24-3：145-150.
- 1999「〔翻訳〕インドネシア共和国パケッAプログラムとパケッBプログラムに関する教育文化大臣決定第0131/U/1994号」『桃山学院大学人間科学』16：139-152。（山本浩子と共訳）
- 1999「〔翻訳〕教育プロジェクトのモニターとその評価——学校外教育・パケッAプログラムの場合」『桃山学院大学キリスト教論集』35：97-111。（Soekartawi 著，山本浩子と共訳）
- 2000「就学問題と自習学習プログラム（インドネシアの教育事情2）」『桃山学院大学キリスト教論集』36：41-61。（表題中の自習は自主の間違いと推測される。）
- 2007「インドネシア共和国における貧困と低教育水準——その悪循環克服の試み」『桃山学院大学キリスト教論集』43：133-168.

1999年の翻訳のパケッA、パケッBはインドネシア語の Paket A、Paket B の訳語であり、自発的補習のために提供される、パッケージ化された学校外教育プログラムのことである。何らかの原因で学校教育の機会を逸した人々のために提供されるものであり、Aは小学校課程、Bは中学校課程である。このプログラムを終えればその課程の修了試験を受ける資格が得られる。なお共訳者の山本浩子は当時本学のインドネシア語の非常勤講師であった。

この第2グループにおけるテーマを教育としたが、1995年の最初の論文から2007年の最後の論文まで一貫している背景は貧困の連鎖、あるいはそれを断ち切ることとみて間違いのない

であろう。すなわち、2007年の表題が示すように、貧困ゆえの低学歴・低学力、それゆえの貧困という悪循環である。林がこの悪循環を断ち切る手だてのひとつとして児童養護施設、具体的にはウイドヤ・アシを重視していたことは間違いあるまい。2007年の論文ではバリを拠点にしつつもインドネシア全体とニアスやジャカルタなどインドネシアの各地に筆がおよんでいる。バリのケーススタディに終わらせないで低教育と貧困の連鎖の問題をインドネシアという国全体の中で捉えようとしているのであり、この分野における林の研究のひとつの到達点を示す論文であろう。

第3 プリンビンサリの小学校における栄養状態と発育問題

2001 「インドネシア・バリ島における子どもの栄養状態と発育問題」『桃山学院大学キリスト教論集』37：45-80. (今井敏子と共著)

2004 「インドネシア・バリ島における子どもの栄養状態と発育問題(2)」『桃山学院大学総合研究所紀要』29-3：121-146.

2004 「インドネシア・バリ島における子どもの栄養状態と発育問題(3)」『桃山学院大学総合研究所紀要』30-2：91-141. (今井敏子と共著)

2005 「インドネシア・バリ島における子どもの栄養状態と発育問題(4)」『桃山学院大学総合研究所紀要』31-2：69-97. (西口多代子と共著)

2008 「〔翻訳〕インドネシアにおける学校保健関連資料集 I——インドネシアにおける子どもの健康問題に関する KOMPAS の新聞記事より」『桃山学院大学総合研究所紀要』33-3：341-351.

2010 「インドネシア・バリ島における子どもの栄養状態と発育問題(5)」『桃山学院大学キリスト教論集』45：33-96.

上で見たように第2の分野では林の視野はインドネシア全体におよんでいる一方、第3の分野ではプリンビンサリ村にある養護施設の児童と彼らが通う小学校という、インドネシア全体から見ればミクロな世界の調査と分析である。とはいえバリ島やインドネシア全体に視野がおよんでいることはいうまでもない。共著者の今井敏子は本学の看護師であり、西口多代子は和泉市教育委員会の管理栄養士である。今井がワークキャンプ引率者に加わったことから林の視野が広がり、子どもの体格、栄養、発育、施設の食事内容などへと新展開をみたものと推測される。このようなミクロな調査がインドネシアでどの程度行われているのか筆者は知識を持ち合わせていないが、少なくとも日本人の手になるものとしてはこのような調査と分析は他に例がないのではないかと想像される。

以上の他に、1997年「バリ島での看護と医療1：余生を見守る家族の絆」『看護人間学教室つうしん』65がある（「林陸雄教授主要著作目録」の1996年11月は1997年7月の間違い）。2頁の中にバリ社会では在宅介護が一般的である様子と、そうした社会慣習との葛藤に苦しむ若者が描かれている。1回目の特別研修の研究成果の一端であり、続編がないのが惜しまれる。

3. 『GKPB の歴史と活力』

バリプロテスタント教会が自身の歴史を克明に跡づけるとともに終章で中期展望を語る *Dinamika GKPB dalam Perjalanan Sejarah* [Tim 2012] と題する書物が2012年に刊行された。この表題を直訳すれば「歴史の歩みの中における GKPB の成長力」となるのかもしれないが (dinamika というインドネシア語の適訳が難しい), ここでは仮に『GKPB の歴史と活力』と訳しておく。全436頁の分厚さがあり, 各章ごとの注の中で典拠をいちいち明記していきながら学術書の趣がある。残念ながら索引はない。次に目次を提示しながらその内容を簡単に紹介しておきたい。

第1章「はじめに」(1-10頁)は, 本書の編集出版に至った背景と目的, また編集過程などを説明する。

第2章「GKPB の活動の場としてのバリ島」(11-75頁)は, GKPB の活動の舞台としてのバリ島についての一般的な説明であり, 地理, 住民, 文化や宗教, 1930年ころの社会経済状況が語られる。人口については1930年と2008年の統計が用いられている。

第3章「バリの教会の誕生以前の布教活動」(77-199頁)においては, バリにおけるキリスト教会設立の前史および最初の教会の設立について, オランダ語史料も多数参照して詳述される。

第4章「シノデに向かう教会 (1931-1949)」(201-274頁)では, 1948年1月にプリンビンサリ村で第1回教会総会 sidang Sinode が開催されるころまでの活動が様々な抑圧や内部対立を含めて記述されている。この時期の特筆すべき出来事としてプリンビンサリ村の入植開村がある。なお, 日本軍政期の記述は簡潔である。

第5章「GKPB とその活動 (1950-2010)」(275-392頁)では, 次のような時期区分によってバリプロテスタント教会のこの60年間の歴史を叙述している。1950-54年「格闘」, 1955-71年「アイデンティティの確立」, 1972-84年「活動の現地化」, 1984-2000年「神学・能力・資力」, 2000-08年「生き生きした教会」。そして第6期として2008-2028年の20年間のビジョンと新しい使命を語っている。

第6章「むすび」(393-397頁)に続いて, 文献・情報提供者・付録などが掲載される(399-436頁)。

ここで試みに第3章のバリプロテスタント教会の前史の部分, 本学のワークキャンプ関係者がつねに参照してきた『マンゴー樹の教会』[マッケンジー1989]と読み比べてみると, 両書の間にはかなりの不一致が目につく。たとえば, 『GKPB の歴史と活力』によればツァン・トハン牧師のバリ来着は1929年ではなく1931年であること, ジャフレイ博士が後にツァンに合流したのではなく, ジャフレイのイニシアティブの下で, オランダ植民地政庁からツァンがバリの中国人の間で活動する許可が得られたことである。

いまはそれらの齟齬を検討する場ではないが, 叙述の詳しさを典拠の示し方から判断して

『GKPB の歴史と成長』の方が信頼度において優る印象である。また『GKPB の歴史と活力』の参考文献にマッケンジーの原著は含まれておらず、『マンゴー樹の教会』がバリプロテスタント教会自身によって無視された格好である。『マンゴー樹の教会』は本学ワークキャンプ関係者によって翻訳出版されたもので、1987年にインドネシア・ワークキャンプが始まり早くもその2年後の1989年に翻訳刊行されたことは特筆に値するであろう。関係者はその後長い間バリプロテスタント教会とその歴史に関して全面的に本書に依拠してきた。林も2011年の論考において当然のこととして本書に依拠している〔林 2011：125〕。いまとなっては『GKPB の歴史と活力』の翻訳出版が望まれる。

4. ウィドヤ・アシ財団

本学のワークキャンプは第1節で見たようにムラヤにおける児童養護施設の設立のお手伝いとして始まった。児童養護施設を本学のワークキャンプ参加者たちはアスラマ (asrama) とよぶことが多いが、アスラマは本来は寄宿舎を意味し、児童養護施設という意味ではない。児童養護施設はインドネシア語ではパンティ・アスハン (panti asuhan) という。バリプロテスタント教会では、下の引用中にもあるように、キリスト教 (Kristen) をつけて、PAK (Panti Asuhan Kristen, キリスト教児童養護施設) とよぶことがある。現在7カ所を数えるバリプロテスタント教会の児童養護施設を運営する機関として、教会内の一部局であるウィドヤ・アシ財団が設けられている。

『GKPB の歴史と活力』はウィドヤ・アシ財団について、第5章「GKPB とその活動 (1950-2010)」のD. 「1972-84年の時期」の第2節「バリの現状に因應する諸活動」において3頁余りを割いて簡潔に記述している。記述量からも記述内容からも本書のなかでほとんど重視されていない印象である。しかしながらワークキャンプの実質的な受け入れ側の歴史と現状についての、いわばバリプロテスタント教会側の公式の説明であるので、紹介しておく価値があると考えて、分量がさほど多くないことでもあるので、そのほぼ全部をここに訳出して紹介しておきたい。

GKPB のキリスト教児童養護施設ウィドヤ・アシの活動

この児童養護施設の活動はバリにおける地方文化を活用する活動には含まれない。とはいえ、この機関は1975年に設立され現在まで継続しているので、GKPB の1972-84年の時期を扱うこの部分で取り上げる。

1975年12月 GKPB はドイツのキンデルノット・ヒルフェ Kindernot Hilfe [困窮児童支援の意] と、セセタンおよびグリーンペンサリに400人の子どもを受け入れることのできる児童養護施設ウィドヤ・アシを設立するための協力関係を結んだ。当初この児童養護施設はウィドヤ・プラ・キリスト教教育財団 Yayasan Pendidikan Kristen Widhya Pura の下で運営された。この財団の下にあるキリスト教の諸学校を発展させる意図があった

からである。それゆえセセタンにある PAK ウイドヤ・プラ I は、セセタンの SMAK [Sekolah Menengah Atas Kristen, キリスト教高等学校] の生徒たちを受け入れ、他方プリンピンサリの PAK ウイドヤ・プラ II は小学校 3 年生から中学校 3 年生までの子どもたちを受け入れた。まさにこの児童養護施設の児童生徒たちを通して、プリンピンサリの GKPB の学校 (SDK [Sekolah Dasar Kristen] Maranatha キリスト教小学校マラナタ) および SMPK [Sekolah Menengah Pertama Kristen] Widhya Pura 3 Blimbingsari キリスト教中学校ウイドヤ・プラ 3 プリンピンサリ) とデンパサルのセセタンにある SMAK ウイドヤ・プラは教育省においても社会においてもよい評価を得た。児童養護施設に受け入れられた子どもたちは経済的には貧しい家庭の子であったが、たいいてい村や学校の中で賢い子どもたちだったからである。

1990年これら施設の運営はウイドヤ・プラ教育財団から切り離された。バリ州社会部の監督下に、ウイドヤ・アシ財団という新しい財団が設立され、すべての施設が児童養護施設ウイドヤ・アシという名前になった。現在 GKPB はウイドヤ・アシ財団を通して7つのキリスト教児童養護施設と3つの児童基盤共同体開発 Community Development Based on Children (CDC) を運営している。2011年1月現在のデータを次に掲げる。

1. PAK ウイドヤ・アシ 1, 所在地南デンパサルのセセタン, 館長 I Made Suastina Adi。擁護する子ども35人 (男22, 女13)。
2. PAK ウイドヤ・アシ 2, 所在地プリンピンサリ, 館長 I Wayan Bagia Astawa。擁護する子ども81人 (男61, 女20)
3. PAK ウイドヤ・アシ 3, 所在地シンガラジャ, 館長 Pdt. I Nyoman Yohanes, M. Th.。擁護する子ども102人 (男51, 女51)
4. PAK ウイドヤ・アシ 4, 所在地ウンタル・ウンタル (女子専用), 館長Agustina Tri Udiartini S. 擁護する子ども72人, 中学生から大学生まで。
5. PAK ウイドヤ・アシ 5, 所在地ムラヤ, 館長 I Putu Frengky Wardana, ST., MA.。擁護する子ども111人 (男68, 女43)
6. PAK ウイドヤ・アシ 6, 所在地バンリ, 館長 Pdt. I Ketut Edy Cahyana, M. Th.。擁護する子ども34人 (男31, 女13)
7. PAK ウイドヤ・アシ 7, 所在地アマラプラ, 館長 Pdt. I Ketut Gede Wibawa, M. Min.。擁護する子ども21人 (男9, 女12)。

CDC プログラムは両親と同居のまま子どもを支援する事業である。財団が提供する支援は飲用水供給, MCK [Mandi Cuci Kakus, 水浴洗濯便所の公共設備], 緑化など両親と地域社会全般に関わるものである。子どもたちは指導を受け, 学費や学校の制服を与えられる。この事業は5年間財団の援助を受け, その後は住民自身が継続することが期待されている。2001年に試行的に始まったこの事業は現在次の3カ所で行われている。

1. CDC, カランアスム県セガ Sega 村, 2001-05年 (終了)。その後 CDC 東スラヤ Seraya Timur において継続。代表 Ni Luh Warningsih, S. Pd., 副代表 I Nengah Sarda。擁護する子ども185人 (男126, 女59)。擁護する子どもはすべてヒンドゥー教徒である。
2. CDC ウブン Ubung, 北デンパサル。代表 I Ketut Giri Astika。擁護する子ども12人 (男10, 女2)。キリスト教徒2人, ヒンドゥー教徒10人。
3. CDC プダワ Pedawa, シンガラジャ県。代表 Ni Kadek Seriasih。擁護する子ども10人 (すべて男)。キリスト教徒1人, ヒンドゥー教徒9人。

つづいてウイドヤ・アシのシンボルマークが提示され, その説明があるが, ここでは省略する。

最後に記される CDC のインドネシア語名は筆者には不明である。林も上記の英語名で CDC を紹介しているが [林 2011: 128-129], ウイドヤ・アシのウェブサイトでは Community Development for Children となっている (2012年12月21日確認)。同じ CDC に2通りの英語名が存在する理由は不明である。なお, ウイドヤ・アシ財団のウェブサイトは Widhya Asih でインターネット検索すれば容易に判明する。このウェブサイトは Widhya Asih Foundation-Bali Fund という名前であり, 英語で書かれている。

『GKPB の歴史と活力』においてはウイドヤ・アシについてこのように簡潔に紹介されるに留まり, その建設と運営の具体的な姿をうかがうことはできないが, 現在ウイドヤ・アシの事務部門の責任者であり, 本学ワークキャンプに際して受け入れ実務を担当するスウィクラマ (Nengah Swikrama) 氏によれば, ウイドヤ・アシの歴史についても同様の書物を編集出版する計画があるとのことで, 氏はとくに初期の関係者が存命の内にインタビューを行いたいという希望をもっている。

以上のようなウイドヤ・アシの事業のうち本学のワークキャンプにとくに関わりが深いのはいうまでもなくプリンピンサリの第2ウイドヤ・アシとムラヤの第5ウイドヤ・アシである。先にも触れたように, プリンピンサリ村にホームステイさせてもらって, 同村の第2ウイドヤ・アシを活動拠点として6~7キロ離れたムラヤの第5ウイドヤ・アシの施設建設を手伝ったのが本学のワークキャンプの第1期 (1987~1999年) であった [林 2011: 132-134]。2000年以降は老朽化した第2ウイドヤ・アシの施設の改築と改善にワーク活動の重点が移っている。なお, この間の2003年に予定されていた第18回ワークキャンプは, 先にも述べたように前年10月のバリにおける爆弾テロの影響などのため中止になった。そのため, この時予定されていた女子棟の改築は本学ワークキャンプによっては実現されなかった。林は学内外有志からの拠金により改築したことを簡潔に記しているが [林 2011: 134], 状況の深刻さを憂えた林の奮闘によってこの改築が実現したのであった。

そのほかにセセタンの第1, ウンタル・ウンタルの第4, またシンガラジャの3ウイドヤ・

アシもワークキャンプの際に親善訪問し見学することがある。

CDC とよばれる在宅支援事業は現在 3 カ所で行われているが、支援する児童数からみて第 1 のカラニアスム県のものが最も規模が大きい。林がスラヤ村の例として紹介しているのはまさにこの事業である〔林 2011：128-129, 151-152〕。バリ島の東部はとくに水事情の悪いところであるが、政府はもちろんオーストラリアの篤志家の援助も巻き込んで事業が推進されている様子がよくわかる。なお林はこの CDC 事業がウブン、セガ、スラヤ、プダワの 4 カ所で行われているようにも書いているが、セガとスラヤは同一のプログラムと考えられるのでじつは 3 カ所である。

林はソカ (Soka) 村についてもウイドヤ・アシの支援事業として子どもの就学支援と植林事業をしていると紹介しているが、『GKPB の歴史と活力』ではソカ村の事業は取り上げられていない。ソカ村の植林事業が始まったのが 2009 年 10 月なので、ちょうど執筆時期にあたり、時期的に間に合わなかったためかと想像される。ソカ村はバリ島の南西部に位置する。その地域は一般的には水事情は良好であり、のびやかな棚田地帯である。しかしながら、地形の関係で水がかりが悪く、どうしても水田を造成できない部分がある。ソカ村には棚田と隣り合わせにまさにこうした部分が存在し、そこに成長が早いセンゴン (Sengon) 樹を植林しようというプログラムである〔林 2011：131-132〕。その他にソカ村では生活用水の浄化がほとんどなされないまま利用されているという深刻な問題があることを林は強調している〔林 2011：129〕。

5. ソカ村のセンゴン (ファルカタ) 植林プロジェクト

ソカ村の植林は、ドイツの NGO キンデルノット・ヒルフェからの資金援助がなくなって資金面での自立を迫られたウイドヤ・アシ財団が児童養護施設の運営費を捻出するための方策の一つとして 2009 年 10 月に始めた事業である。ソカ村にあるバリプロテスタント教会の所有地に植林し、その材を売って収益を運営費に充当しようというものであり、植えるのは成長が早くて 5 年目には収穫が見込める樹種とのことである。このソカ村とその植林事業については林が紹介しており、そこにはウイドヤ・アシ財団の企画書のコピーも掲載されている〔林 2011：131-132, 153-158〕。本学のワークキャンプでは、2010 年 (第 24 回) と 2011 年 (第 25 回) にプリンビンサリ村に入る前にそれぞれ 2 日ほどをソカ村植林ボランティア活動にあてている。2012 年 (第 26 回) のワークキャンプは現地を見学したが植林作業はしなかった。なお、早くも 2010 年 3 月に 2009 年 (第 23 回) のワークキャンプ参加学生有志が、2011 年 3 月には 2009 年と 2010 年のワークキャンプ参加学生有志がそれぞれ数日間ボランティア活動として植林作業を行った〔林 2011：137-141〕。この自主的活動は林の勧めに基づくものであった。

本稿では植林している樹木の名前などについて、筆者が熱帯林学の専門家に教えてもらったことを踏まえて述べておきたい。

ソカで植林している樹木の一般的なインドネシア名はセンゴン (sengon) である。カタカナではセゴンと表記することもあるがセンゴンのほうが一般的と思われる。センゴン〜とよばれる樹種が複数存在するので、いま取り上げているものはこれらと区別するためにセンゴン・ラウト (sengon laut) とよばれる。しかし、インドネシアで単にセンゴンといったときには他の種類のセンゴンではなくセンゴン・ラウトのことなので、本稿でも単にセンゴンとよぶことにする。

林陸雄はこの樹をアルビチアと記し〔林 2011: 131〕、ウィドヤ・アシのウェブサイトでは *Albasia* と記している (2012年12月21日確認)。ところが、現在の日本の熱帯林業の世界では一般にセンゴンまたはファルカタ (*falkata*, *falcata*) とよばれている。この違いは次のような事情によるもので、今後はファルカタが一般化するものと思われる。

いま筆者の手元にある大部な『インドネシア語大辞典』(2008年版) には *sengon* が見出し語になっていて、次のような説明がある〔DPN 2008: 1272〕。

樹木、高さ 35 m に達し、園地 (perkebunan) に日陰樹としてたくさん植ええられる。材は柔らかく、樹皮と心材の間の部分は白く、心材は茶色い。一般に耐久性に欠け、多くマッチの軸に用いられる。 *Albizzia chinensis*。

日陰樹とはその樹自体が目的ではなく、コーヒーなどの商品作物に直射日光が当たるのを制限する目的で植えるものである。現在ではセンゴンはそれ自体を材として利用するために植えることが多いのは後に見るとおりである。また材としての用途はマッチの軸に限られず合板やパルプその他かなり広範囲にわたっている。

また筆者の手元にある同じく大部なインドネシア語英語辞典には見出し語 *sengon* があり、“k. o. tree, yellow mimosa, *Albizzia chinensis*” と説明されている。つづいて同じ見出し語の中で *sengon laut* を “white *albizzia*, *Paraserianthes falcataria*.” と記述している〔Stevens 2004: 914〕。

どちらの辞書もセンゴンの学名として *Albizzia (Albizzia) chinensis* をあげている。後者はセンゴン・ラウトの学名として *Paraserianthes falcataria* をあげていて、紛らわしい記述である。おそらく分類が確立する過程で複雑な経緯があったのだろう。なお、いずれの辞書にも *albizzia* ないし類似の綴りの見出し語は存在しない。

少し古い『熱帯の有用樹種』ではセンゴン・ラウトの学名を *Albizzia falcata* としている〔農林省 1978: 192〕。しかし現在確立している学名は *Paraserianthes falcataria* である。この学名は上のインドネシア語英語辞典にもあがっている。すなわち、かつてセンゴン・ラウトの学名が *Albizzia falcata* となっていた時代があり、その影響でアルベチアの名前が現在も用いられていると考えられる。

一般に同じ植物が別名でよばれる一方、分類学的には異なる植物が同じ名前によばれることが珍しくない。植物分類が確定する過程で様々な学名が社会に流通し定着してしまうことがある。まさにアルビチアがこれにあたるようである。

センゴンの和名はモルッカネムというが、材の色が白くて軽く、桐の代わりに使えることから南洋桐ともよばれる。ただし、植物学的には桐とはまったく関係がない。桐製のように見える木箱がじつはセンゴン製であることが必ずしも珍しくないらしい。

筆者の知る範囲では、バリ島に近い東部ジャワの東端部（パスルアン Pasuruan より東の部分）に日系の合板製造などの林業の会社が少なくとも2社操業している。ルマジヤン（Lumajan）に工場のある南海プライウッドとプロボリンゴ（Probilanggo）に工場のある KTI である。どちらもこの会社名でインターネット検索すると日本語のウェブサイトを見ることができる。南海プライウッドは高松市に本社があり、KTI は Kutai Timber Indonesia の略称であり住友林業の子会社である。両社ともセンゴンの植林事業にも力を入れているようである。両社のウェブサイトで樹木の名前はアルビチア等々ではなくファルカタが用いられている。インドネシアと日本の事業者の間ではファルカタが定着しているのであろう。ファルカタでインターネット検索すればかなりの数のウェブサイトが簡単にわかり、それらからその商品としての用途などもかなり詳しくわかる。ウイドヤ・アシのウェブサイトが書いている Albasia で検索してもかなりの情報が手に入る。またカタカナでアルバシアならいくつかのウェブサイトが判明するが、アルビチアでは判明しない。

先に上げたインドネシア語英語辞書で注目されるのは、sengon に続いて sengonisasi という見出し語が上がっていることである〔Stevens 2004: 914〕。「センゴン樹の植栽を奨励すること」と説明され、さらにその動詞形 menyengonisasi 「センゴン樹の植栽を奨励する」が取り上げられている。辞書にこの語が載るほどセンゴン植栽は一般化しているとみてよいであろう。試みに sengonisasi でインターネット検索してみると非常に多数のウェブサイトが現れる。センゴン植栽がインドネシアで盛んに行われていることの反映であろう。たしかに道路を走っていて小規模なセンゴン植栽を目にする機会が増え、また道路脇でセンゴンの苗木を売っているのを目にすることもあり、簡単な現金収入源としてインドネシアの農村にセンゴン植樹が広まっているのである。

お わ り に

本稿では林陸雄による報告の続編として、最初に本学のワークキャンプのあゆみの全体像を把握するのに有用な文献を取り上げ、つづいてワークキャンプから多くの知的・実践的刺激を得た林の論考を3つの分野にわけて紹介した。そして、最近（2012年）バリプロテスタント教会が刊行した『GKPB の歴史と活力』の内容を簡単に紹介し、その中のとくにウイドヤ・アシ財団に関する記述についてはほぼ全文を訳出した。最後にソカ村におけるウイドヤ・アシによるセンゴン樹の植林事業に関して林の報告に若干の補足を行った。林の論考に続いて再度本共同研究の報告論文の機会を与えられた総合研究所委員会に末筆ではあるが感謝申し上げる。

文 献

- 坪山孝2007「国際ワークキャンプ・インドネシア20年の歩み」『桃山学院大学キリスト教論集』43：117-131.
- 藤間繁義1997「国際協力の架け橋となることを願って——学生たちとのワークキャンプ四十五年を省みて」桃山学院大学1997：42-65
- 農林省熱帯農業研究センター編1978『熱帯の有用樹種』熱帯林業協会
- 林陸雄2007「桃山学院大学における国際ワークキャンプの課題と展望」『桃山学院大学キリスト教論集』43：43-69
- 林陸雄2011「バリ・プロテスタント・キリスト教会の社会事業と学生による支援活動」『桃山学院大学キリスト教論集』46：121-158
- マッケンジー，ダグラス著，桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会訳1989『マンゴー樹の教会——バリ島のキリスト教』聖公会出版
- 桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会編1997『アジアの人びとの協働から学ぶ——桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプの歩み』聖公会出版
- DPN 2008: Departemen Pendidikan Nasional, *Kamus Besar Bahasa Indonesia Pusat Bahasa*, Edisi Keempat, Gramedia, Jakarta. (国民教育省『言語センター版インドネシア語大辞典』第4版)
- Stevens, Alan M. and A. Ed. Schmidgall-Tellings 2004: *A Comprehensive Indonesian-English Dictionary*, Ohio University Press.
- Tim Penulis Sejarah Gereja Kristen Protestan di Bali 2012: *Dinamika GKPB dalam Perjalanan Sejarah*, Gunung Mulia, Jakarta. (バリプロテスタント教会歴史記述チーム『BKPBの歴史と活力』)

(2013年3月14日受理)

Several Matters on the Co-relationship
between the Bali Protestant Christian Church
and the International Work Camp
of Momoyama Gakuin University

FUKAMI Sumio

This essay complements several matters in notes by the late professor Hayashi Rikuo (1940–2012), “Social Services by Bali Protestant Christian Church and Helping Support of Japanese Students” (2011). After enumerating several documents considered helpful to get an overall understanding of the International Work Camp of Momoyama Gakuin University, this paper introduces an outline of the study done in Bali by Hayashi, who was greatly inspired by the work camp and related activities.

The history of the Bali Protestant Christian Church is briefly explored through presentation of the book *Dinamika GKPB dalam Perjalanan Sejarah* (Dynamics of the Bali Protestant Christian Church in the Course of History, 2012), which was recently self-published by the Church. The part that describes Yayasan Widya Asih (Widya Asih Foundation), one of its sub-organizations, is mostly translated because it is the foundation that takes care of the work camp. Lastly, this paper provides supplementary comments to Hayashi’s notes on the foundation’s tree planting project in the village of Soka.